

はじめに (翻訳の〈倫理〉をめぐる総合的研究)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今野, 喜和人 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00008207">https://doi.org/10.14945/00008207</a>

## はじめに

静岡大学人文社会科学部言語文化学科は、日・中・韓・英・独・仏・露・西と、少なくとも八つの言語文化の専門家を擁し、それぞれ研究の領域や方向性・スタイルも微妙に異なるため、これらを組み合わせることで国際性はもちろん、学際性を十分に発揮した成果が挙げられるのではないかという期待から、かねてより共同研究を模索していた。その結果、これらの言語文化を横断的・重層的に考察するには「翻訳」のテーマが最も適していると考えられたため、平成17年に「翻訳文化研究会」を組織することとなった。それ以来、原則として年数回のペースでメンバーの研究発表を行うほか、他学部・他部局、さらに他大学や非大学関係者のゲストをお招きして、一般公開の講演会・シンポジウムも開催してきた。機関誌『翻訳の文化／文化の翻訳』も今年度末で10号を数えるに至っている。メンバーも言語文化学科のみならず、大学教育センターや情報学部の教員も参加するようになって、学外の研究者との交流も増大した。さらに、平成20年度から22年度にかけては、科学研究費補助金基盤研究(C)「恋愛・結婚をめぐる異文化交流・翻訳の諸問題」(課題番号20520321)の採択を得られ、単なる起点言語テキストから目標言語テキストへの古典的「翻訳」のみならず、映画、演劇、音楽、美術等、文学と別のジャンル・メディアの間の翻案・改変についても研究を続けている。メンバーの多くが翻訳書を出版した経験があるため、実践と研究が相互に関連するというメリットも感じているところである。

そうした一連の研究を受け、新たに浮上してきた翻訳の「倫理」というテーマについて科研費を申請したところ幸いにして採択され、平成24年度から26年度にかけて基盤研究(C)「翻訳の〈倫理〉をめぐる総合的研究」(課題番号24617006)を遂行することとなった。本報告書はその成果の一部である。

本報告書に掲載された論文を見ると、扱われる領域は日本、中国、アメリカ、フランス、スペイン等、時代は古代ローマから現代まで、ジャンルとしては小説はもちろん詩、戯曲、政治、法律、宗教、倫理、また言語テキスト以外にも映画、絵画と対象は多岐にわたっている。上にも述べたように、私たちの研究が狭義の翻訳だけでなく、一つの記号系を越えた翻案や改変も対象としているためもあるが、メディアとメディアの境が曖昧になる現代の文化状況、いわゆる「ポストメディア」を象徴しているとも言えそうである。これらの研究によって、翻訳の〈倫理〉が問題にされる様態が、国によって、時代によって、ジャンルとジャンルの関係によって、微妙に異なることが分かり、翻訳研究が比較文学比較文化、言語学、カルチュラル・スタディーズ、哲学、美学等々の広い領域との相互関係において成立していることがますます実感できるようになった。

もう一つ、特筆すべき事柄として、翻訳を考える上で避けては通れない「創作」との関係にアプローチするため、言語と言語の狭間に生きて活動されてお

られる作家たちの生の声を聞く機会を持てたことが挙げられる。これはメンバーにとっては大きな刺激となり、学生や一般市民にも公開することで、科研費の成果還元の一環となっている。研究会としてこれまでお迎えしたのは楊逸、よしもとばなな、リービ英雄、多和田葉子の各氏だが、本研究の締めくくりに2014年12月に中村文則氏をお迎えし、連携研究者でもある野崎歓・東京大学教授との対談、および研究会メンバーとの鼎談をお願いした。当日は静岡駅に近い100名収容の会場を用意したが、あっと言う間に申し込みが定員に達し、途中からは宣伝を控えねばならないという、嬉しい驚きもあった。小説、翻訳、文学研究、エッセー等で活躍されているお二人の言葉は、私たちの研究テーマとも多面的に交差しながら、創作と翻訳の力を改めて実感させてくれるイベントとなった。当日の刺激的でユーモア溢れる議論と、観客の熱気が伝わる記録を巻末に掲載した。

まだまだ究めなければならない領域は多く、研究の至らなさを実感せずにはいられないが、ひとまずこの段階で成果を問い、来年度から新たなテーマに発展させようと模索しているところである。関係各位からの忌憚のないご批評を待ちたい。

2015年3月

研究代表者 今野 喜和人